明治時代以前の「旅行」という語について

石塚令子*
shunkin1223@hotmail.com

Contents

1. はじめに
2. 典拠
3. 上代及び中古
4. 中世
5. 近世
6. おわりに

Abstract

本稿は、明治時代以前の「旅行」という語の意味の変遷について、語誌的観点から明らかにしたものである。

先行研究によると、「旅行」は、明治時代以降に、交通機関の発達や宿泊施設の充実といった近代文明の恩恵を受け、広く一般に普及した語である。そこで本稿では、明治時代以前の「旅行」の様相を探るため、「旅行」の典拠と上代から近世までの「旅行」の来歴を明らかにした。また、近代文明との関わりを探るため、西洋文明の流入が始まった江戸時代末期の「旅行」の様相についても明らかにした。

「旅行」は中国の漢文が典拠であり、日本での音読みされた用例は平安末期の『江談抄』が初出である。中世、近世を通して「旅行」は、≪旅≫≪旅に行く≫という意味であった。また、武士や貴族、僧侶といった支配・教養層が主に使用する位相語であり、文書語であった。特に、江戸時代を通して、幕府の公的な記録や武士の残した文献に「旅行」が多く使用されていた。江戸時代末期には、西洋文明との関わりにより、西洋人の行う移動や日本人が西洋に赴くことを扱った文献、対訳辞書、翻訳書に用例が多く散見されるようになる。江戸時代末期においても、「旅行」は、武士階級が主に使用した位相語であり、文書語であったが、「旅行」が持つ≪旅≫≪旅に行く≫という明示的意味(denotation)に加え、≪新進的なもの≫という副次的意味(connotation)が付加された。江戸時代末期に、西洋文明による新たな副次的意味が付加されたことは、その後の明治時代における「旅行」の日常語化への伏線となっていくのである。

Key Words：語誌、漢語、位相語、文書語、西洋文明

* 明知大学校 講師.

1. はじめに

本稿は、明治時代以前の「旅行」という語の意味の変遷について、語誌的観点から明らかにしたものである。

「旅行」について、『日本国語大辞典』(第二版)は、≪視察、観光、保養、あるいは社寺参詣などの目的でよその土地にでかけて行くこと。たび。行旅。≫と説明している[1)]。

柳田(1964)、阪下(1982)、石森(1989)、白幡(1996)によると、「旅」が記紀の時代から使われてきた来歴を持つのに対して、「旅行」は交通機関の発達や交通網の充実、宿泊施設の整備といった近代文明の恩恵を受けた語であり、一般に普及したのは明治以降であることを指摘している。また、広田(1969)や飛田(2002)では、「新婚旅行」は、'Honey－moon'の訳語として、明治20年代中頃から用例が見え始めたとしている。以上の先行研究によれば、「旅行」という語は、明治時代以前は日常語ではなく、明治以降に近代文明の流入と共に意味が付加され、一般に広く普及し、現在に至っていることが分かる。さらに、「新婚旅行」が明治20年代中頃から登場したことから、「旅行」は明治20年代にはある程度、認知されていたと推測できる。

では、明治時代以前の「旅行」の様相はどのようなものであったのだろうか。本稿では、まず、「旅行」の典拠を明らかにし、上代から近世までの「旅行」の来歴を追っていくことにする。また、近代文明との関わりを探るため、西洋文明の流入が始まった江戸時代末期における「旅行」の様相も明らかにする。

2. 典拠

「旅行」の典拠は中国の漢文である。『日本国語大辞典』(第二版)によると、『礼記』には、次のような例が見られるとしている[2)]。

---

1) 日本国語辞典第二版編集委員会編(2002)『日本国語大辞典』第二版、第十三巻、p.980

○ 曾子問曰、三年喪弔乎。孔子曰、三年之喪、練不群立不旅行」【『礼記(上)』】[3]
（該当語の下線は引用者。以下の用例も同じ。）

また、「旅行」の典拠と意味について、『大漢和辞典』(修訂第二版)は、次のように記している。

○ 一. 連れ立って行く。侶行。
〔説文〕麗、旅行也、鹿之性、見食急、則必旅行。
〔廣雅、釋獸〕不群居、不旅行。
〔埤雅〕鮒、小魚也、即今之鯽魚、此魚旅行、吹沫如星。
〔説苑、辨物〕不群居、不旅行。
〔蘇軾、淩虚台記〕見山之出於林木之上者、纍纍如人之旅行於墻外而見其髻也。
二. たび。みちゆき。逆旅。羈旅。[4]

『大漢和辞典』(修訂第二版)の「二.」の例は、現在の意味と同じであるが、「一.」の「連れ立って行く。侶行」は、現在の日本語の「旅行」には用いられてはいない。

ちなみに、『字統』は「旅」という漢字について、「軍列、たび、つらねる」と記している。加えて、「旅」に関しては、「㫃と从とに従う。㫃は旗。旗を掲げて、多くの人が他に出行する意。それで軍行の集団の意となり、旅行の意」として使われていたが、「羈旅・旅客の義は、列國期以後、氏族的共同体が分解し、本貫の地を離れて他に士官するための、客遊の時代に入ってからのこと」と説明している[5]。つまり、「旅」は、初めに≪軍列≫の意味があり、それが≪たび≫や≪つらねる≫という意味も含むようになったのである。このような「旅」の意味の変

2) 上掲書『日本国語大辞典』第二版 第十三巻、p.980
3) 竹内照夫(1971)『礼記(上)』新解釈漢文大系 第27巻、明治書院、pp.293～294
日本語訳は、「曾子問ひて曰く、三年の喪に弔するか、と。孔子曰く、三年の喪は、練して群立せず、旅行せず。」である。「練」とは、「三年の喪において、一年して小祥の祭を行い、これまで麻の衣冠を、練(練り絹)の衣冠に改める」ことである。
4) 諸橋轍次(1989)『大漢和辞典』修訂第二版 巻五、大修館書店、p.692
5) 白川静(1984)『字統』平凡社、pp.880～881

遷に呼応するように、「旅行」についても、まずは≪連れ立って行く、侶行≫という意味があり、その後、≪たび、みちゆき、逆旅、羈旅≫という意味が発生したものと考えられる。

3. 上代及び中古

中国の漢文である「旅行」が、どのような経緯で日本に流入したかは不明である。「旅行」の初出に関して『日本国語大辞典』(第二版)は、中古末期の『江談抄』としているが、本調査においても、「旅行」の用例は上代、中古末期までの文献には確認できなかった。しかし、「旅行」を「たびゆく」または「たびゆき」と訓読みしている例は多く見られる。次は『萬葉集』に見られる例の一部である。

○ 白栲の藤江の浦に漁する海人とや見らむ旅行くわれを【『萬葉集』(759頃成立)巻第十五・3607】[6]

○ 旅行に行くと知らずて母父に言申さずて今ぞ悔しけ【『萬葉集』(759頃成立)巻第二十・4376】[7]

訓読みではなく、音読みされた「旅行」の用例は、中古末期に変体漢文で書かれた『江談抄』が最初である。以下はその用例である。

○ 取モソ返ルトテ、運財偸去其土、移異国恐思之間、常只恐尓従者之中一人妊者アリテ、於旅行ノ共生産。【『江談抄』五八(天永2頃・1111年頃)】[8]

---

6) 高木市之助・五味智英・大野晋校注(1969)『萬葉集 四』日本古典文学体系7、岩波書店、p.61
下線は「たびゆく」と読む。
7) 上掲書『萬葉集 四』p.421
下線は「たびゆき」と読む。
8) 大江匡房言談、山根對助・後藤昭雄校注(1997)「江談抄」『新古典文学大系』32、岩波書店、p.545
題名は「張車子富可見文選思玄賦事」であり、中国の逸話である。

本調査では、上代・中古においては、『江談抄』以外には「旅行」の用例を確認することができなかった。「旅行」の用例が一例しか確認できなかったので、はっきりしたことは言えないが、その用例が変体漢文の文献であることを考えると、中古の「旅行」は漢文などの文章に用いられる語であったことが推測される。

4. 中世

中世に入ると、「旅行」の用例は中古よりは多く確認できるようになるが、用例が見られる文献の数も少ない上、文献当たりの用例数も極少数である。次に、本調査で確認できた用例を年代順に列挙するが、『日本国語大辞典』(第二版)や『時代別国語大辞典　室町編』に示されている用例以外に、「旅行」が用いられている文献は見つからなかった。

○ 去永暦御旅行之時。累代芳之輩代芳契之輩。或夭亡以変々之上。為左遷之身。敢無従之人。【『吾妻鏡』元暦元年三月一〇日(元歴元・1184)】[9]

○ 廿八日乙未。鶴岳宮供僧等。自去廿六日勤仕將軍家御旅行御祈祷。【『吾妻鏡』建仁三年五月二八日(建仁3・1230)】[10]

○ 十五日癸亥霽。大夫判官定員爲御使上洛。是大閤來月可有御物詣之間。依被進旅行御調度也。【『吾妻鏡』嘉禎三年九月一五日(嘉禎3・1237)】[11]

○ シテ　われなまじひに弓馬の家に生まれ、世上に隠れなき身とて、思はざるほかの旅行の道、関の東に赴けば、あと白川を行く波の、いつ帰るべき旅ならん。【『盛久』(応永3・1427)】[12]

---

9) 国史体系編修会編(1980)『吾妻鏡』第一、吉川弘文館、p.107
10) 上掲書『吾妻鏡』第二、p.602
11) 上掲書『吾妻鏡』第三、p.201
12) 観世元雅著、小山弘校注(1960)「盛久」『謡曲集 上』日本古典文学大系40、岩波書店、p.415

○ これよりして新関共を、世の乱れに事寄せて、思ふさまに立て置きつつ、旅行のさはりと成にけり。仁木などいへる領主の、かたかだをこしらへて、事ゆへなくは通り侍れど、心苦しき事のみありけり。【『藤河の記』(文明5・1473頃)】[13]

○ 旅行(リヨカウ) 【『文明本節用集』(文明6・1474)】[14]

○ 宗氏法師入来、古今集聞書以下和哥相伝抄物等一合付封預置之、老生遠路旅行、再会難期之間、若無帰京之儀者令附属之由丁寧談之、【『實隆公記』延徳三年四月(延徳3・1491)】[15]

○ めでた。そもそも酒は百薬の長として、寿命を延ぶ。その上酒に十の徳あり。旅行に慈悲あり、寒気に衣あり、推参にたよりあり。【『餅酒』(永禄4・1561)】[16]

○ タレヤラ旅行ノ時ニ路ニトマツテ美人ニアウコトゾ【『玉塵抄』 第三十七册(永禄元－永禄13頃・1558～1570頃)】[17]

○「旅行ノ路 タビノ道中ヲ云ナリ」【『謡抄』(文禄4・1595)】[18]

○ 旅行(カウ) 【『易林本節用集』(慶長2・1597)】[19]

謡曲の解説書である『謡抄』の用例には「旅行ノ路」が「タビノ道中」と説明さ

『盛久』は謡曲である。

13) 一条兼良著、鶴崎裕雄・福田秀一校注(1990)「藤河の記」『中世日記紀行集』新日本古典文学体系51、岩波書店 p.387

14) 中田祝夫(1970)『文明本節用集研究並びに索引』影印篇、風間書房 p.101

15) 三条実隆(1932)『實隆公記』巻二 下、続群書類従完成会大洋社、p.585

16) 作者不詳、小山弘志校注(1960)「餅酒」『狂言集 上』日本古典文学大系42、岩波書店、p.87
『餅酒』は脇狂言であり、引用部分は登場人物の二人が「三段の舞」を踊る場面である。

17) 惟高妙安著、中田祝夫編(1971)『玉塵抄』(8)、勉誠社、p.46

18) 藝能史研究會編(1978)「謡抄」『日本庶民文化史料集成』第三巻(能)、三一書房、p.548

19) 中田祝夫(1979)『古本節用集六種研究並びに総合索引』影印篇、風間書房、p.454

れていることから、「旅行」の意味は≪旅≫と認識されていたと考えられる。中世後期の言語実態を垣間見ることができる『日葡辞書』は、「旅行」について、次のように記述している。

○ Reoco. レョカウ Tabini yuqu.(旅に行く) 旅をすること、あるいは、道中すること。文書語。▶Rioco
Rioco. リョコウ(旅行) Tabini yuqu.(旅に行く) 自分の定住している町、あるいは、土地を出て旅をすること。▶Reoco. 【『日葡辞書』(慶長8−9・1603-1604)】[20]

『日葡辞典』にも「旅行」の意味は≪旅に行く≫であり、「文書語」であったと書かれている。本調査では、口語資料として、謡の部分ではあるが狂言『餅酒』と抄物『玉塵抄』に「旅行」が2例確認できた。しかし、一般には「旅行」は広く使われる語ではなく、文書語としての認識が強かったものと見られる。それは、当時、隆盛を極めた物語には用例が見当たらず、また、当時多く書き記された紀行文にも『藤河の記』以外には、用例を確認することができなかったことからもうかがえる。

また、書き手や、文献の「旅行」の行為を行う者が、『吾妻鏡』、『盛久』に登場するような武士であったり、『玉塵抄』の高僧、『実隆公記』、『藤河の記』のような貴族であることも大きな特徴である。中世の「旅行」は、文書語であり、支配階級や教養のある武士や貴族といった者が使用する位相語であったと言える。

また、「旅行」が中古よりも多くの用例が見られるようになったことに関して言えば、中世の漢語の隆盛や文献数の増加といったこともあろうが、移動環境の整備によって長距離の移動が可能になったことや、巡礼を中心とした移動が広く行われるようになったこと[21]と関連があるように思われる。移動の内実や環境が向上したことが、「旅行」が中古より多く使われるようになった一因ではなかろうか。

---

20) 土井忠生・森田武・長南実編訳(1980)『邦訳 日葡辞書』岩波書店、pp.529, 534
21) 新城常三(1971)『庶民と旅の歴史』NHKブックス143、日本放送出版教会、pp.31～46

5. 近世

5.1 江戸時代末期以前

江戸時代に入ると、移動のための社会的インフラの整備が格段に進み、武士階級の参勤交代などの支配階級の移動だけではなく、庶民の間でも伊勢参りなどの参詣や湯治が広く行われるようになった[22]。それに呼応するように、確認できた「旅行」の用例も中世に比べると多様である。

まず、「旅行」の使用が最も目についたのは、幕府の公的な行政文書や武士が記した文献である。次はその一部である。

○（前略）此恨を報ひまいらむとて、こも僧といふものになりて、戸報をねらひまいらせすといふ事をひそかに我に告知らせしものあり。「もし聞し事のごとくならむには、かゝる旅行の時をこそうかゞひまいらすべけれ」とおもひしかば、なにとなく、夜ごとに番の兵をわかち置き、みづから巡視する事、駿河にての事のごとくしてありし也。【『折りたく柴の記』上（享保元・1716)】[23]

○ 旅行の辨 坤ノ部二

一. 四民共ニ行旅ノ事は、故なくしてハする事なき物なり。士は君命に隨テ旅行し、農商工はそれ家職の為、或ハ後世菩堤ニ信を起して国々を巡礼修行する有。余情の人有て、慰ミ遊山の為に旅行する、世に稀なり。さなくしてハ唯我か屋に居て起臥の心の侭なる楽ミにしくはなし。とにかくニ旅行はつらき物なれハ、かハゆき子に旅をさすへしと言諺、尤可なり。【『民間省要』(享保6・1721)】[24]

---

22) 上掲書『庶民と旅の歴史』pp.81～116

23) 新井白石著、松村明校訂(1965)「折たく柴の記」『戴恩記 蘭学事始 折りたく柴の記』日本古典文学大系95、岩波書店、p.159

24) 田中休愚著、村上直校訂(1996)『新訂 民間省要』、有隣堂、pp.243～244
『民間省要』は、藩の役人であった田中休愚が地方役人の民政や村人の生活の実態を明らかにした書物であり、江戸幕府八代将軍徳川吉宗に献上された。

○ 文化九申年九月

一．高家衆中條河内守伊勢御大名旅中紀伊殿水戸殿家来行逢之節問合但御城附よりは前々より家老始下乗下馬不致趣也御書面御名代旅行之節道中方別ニ御規定と申も無之都て御朱印ニて旅行之面々並御道具類其外萬石以上並御旗本之面々道巾半分ツヽ相譲り通行いたし(以下略)【「御名代旅行と往逢之節心得」(文化9・1812)】[25]

○ 一．九鬼大隅守中間中山道旅行伺書并御附札口上覚九鬼大隅中間壱人病気ニ付駕籠ニ而為差登申候然ル所東海道八川々多病人之儀ニ而渡船等差支申候儀も難斗御座候間継人足弐人相雇中山道旅行仕度奉存候此段奉伺候以上【「九鬼大隅守中間中山道旅行伺書」(文政5－天保元・1822-1830)】[26]

○ 弘化二年巳年六月廿九日道中御奉行久須美備後守様へ差出七月二日御附札相済摂津守義参勤候段ニ付東海道旅行之節人足五拾人馬弐拾五疋先触差出宿々継立旅行仕候所(以下略)【「太田摂津守旅行人馬之問答」(天保15－嘉永元・1844-1848)】[27]

以上のように、武士階級の公的な移動を始め、江戸時代に行われていた移動を「旅行」としている。このようなことから、当時の知識・支配階級であった武士にとって、様々な移動の形態を総称する上位語として、「旅行」が認識されていたことが分かる[28]。

一方、小説類や浄瑠璃や歌舞伎の台本、俳諧には「旅行」はほとんど見られなかったが、僅かながら、『伊曾保物語』、『曲亭伝奇花釵児』、『東海道中膝栗毛』、俳諧の一部の作品に「旅行」の用例が見られた[29]。しかし、『東海道中膝

25) 樋畑雪湖監修(1938)「駅肝録」『日本交通史料集成』第二輯、国際交通文化協会、p.358
26) 史籍研究會(1983a)「天保雑記(一)」『文政雑記 天保雑記(一)』内閣文庫所蔵史籍叢刊 第32巻、汲古書院、pp.550～551
27) 史籍研究會(1983b)「弘化雑記」『弘化雑記 嘉永雑記』内閣文庫所蔵史籍叢刊 第35巻、汲古書院、p.36
28) このような武士の移動を記したいくつかの文献の題名にも「旅行」が使われている。例えば、江戸から備前までの参勤の帰国を綴った『丁未旅行記』(1667)、幼君に付き添い江戸から大坂赴く様子を記録した『東海道旅行記』(1799)などである。
29) 歌舞伎の解説書の『役者論語』(1774)と、俳諧の解説書の『三冊子』(1702)には「旅行」の用例が数例確認された。

栗毛』での「旅行」の使用は書物の説明や成立の経緯などが記されている漢文訓読調の部分に限られており、俳諧も「旅行」が見えるのは前書きの部分であって、句の部分には使われてはいない。辞書類では『書言字考節用集』に用例が確認された。以下は用例である。

○ ある時、しやんと旅行(りよかう)におもむかせ給ふに、下人(げにん)どもに荷物をあておこなふ。【『伊曾保物語』上「第二」(寛永16・1639)】[30]

○ 旅行(リヨカウ)【『書言字考節用集』(享保2・1717)】[31]

○ 野水が旅行を送りて
見送りのうしろや寂し秋の風【『みつのかほ』(享保11・1726)】[32]

○ 此書、両士が東都神田の八丁堀に、店借し居たりし中のことを著し、終に旅行の発起とする所以の、馬鹿らしきことを、作者が寝酒の飲料に、余計の著述をなすものならし【『東海道中膝栗毛』「累解」(享和2－文化6・1802－1809)】[33]

○ 義輝始終聞し召、「(中略)われ今しのんで諸国を遊行し、みづから世界の美人をたづねば、大内陶が虚実もしるべく、且つは庶人の相を滅して、日ごろの望も叶ふべし。松永旅行の用意せよ」と遠慮会釈もなまめきし、【『曲亭伝奇花釵児』「第一齣」(文化元・1804)】[34]

また、1800年前後から多数刊行された、今でいう旅のガイドブックの類にも

30) 作者不詳, 前田金五郎・森田武校注(1965)「伊曾保物語 上」『仮名草子集』日本古典文学大系90、岩波書店、p.364
31) 中田祝夫・小林祥次郎(1973)『書言字考節用集研究並びに索引』影印篇、風間書房、p.22
32) 松尾芭蕉著、大谷篤蔵・中村俊定校注(1962)「発句篇」『芭蕉句集』日本古典文学大系45、岩波書店、p.136
33) 十返捨一九著、麻生磯次校注(1958)『東海道中膝栗毛』日本古典文学全集62、岩波書店、p.23
34) 曲亭馬琴著、徳田武他校注(1992)「曲亭伝奇花釵児」『繁野話・曲亭伝奇花釵児・催馬楽奇談・鳥辺山調綫』新日本古典文学大系80、岩波書店、p.137

「旅行」の例が確認できた。当時大ベストセラーを記録した『旅行用心集』(文化7・1810)や、『東国旅行談』(天明8・1788)、『大坂より京都迄登船独案内』(享和元・1801)、『七ざい所巡道しるべ』(享和2・1802)、『旅行便覧』(享和2・1802)、などである[35]。階級を問わず、長距離の移動や行楽目的の移動が可能になったことにより、この類の書が多く愛読されるようになったためであろう。以下はその用例の一部である。

○ この一小冊にして千里の行に易からしめんの予が微意なり四方の君子これを懐にせバ旅行の要たる事虎に翼を生ずるがごとくならむとしかいふ【『七ざい所巡道しるべ 旅行便覧』「叙」(享和2・1802)】[36]

○ 富貴の人にても生得病身にて心にのミやたけに思ふとも、自ら旅行し珍敷勝景を見て山坂を歩行、大山霊場に登ることあたはず、偶駕籠にて旅行すれとも病身にてハ、いかなる金銀財宝にあかしするとも貧者の壮健なる楽ミに及ふことあたわざるは無念ならずや。しかるに、富貴の人は更也、貧賤にても其身壮健にして参宮旅行すること此上なき幸ひなりといふべし。【八隅蘆庵『旅行用心集』「自序」(文化7・1810)】[37]

以上のように、「旅行」は中世に引き続き、近世においても文書語の性格が強く、日常語とは言えなかった。また、武士や貴族、僧侶などの支配・知識階級に使われる位相語であったと考えられる。しかし、旅のガイドブックの類に「旅行」が散見することを考えると、中世までの「旅行」の用いられ方より広がりが感じられる。

---

35) これらは各地の名所や風俗を紹介したものが多い。ガイド書には「旅行」のほかにも「道中」「遊覧」「巡覧」といった語が題名に使われている。

36) 竹陰亭著、今井金吾監修(1996)「七ざい所巡道しるべ 旅行便覧」『道中記集成』第19巻、大空社、pp.157～158

37) 八隅蘆庵(1972)『旅行用心集』生活の古典双書3、八坂書房、p.2

5.2 江戸時代末期

江戸時代末期になり、オランダ以外の西洋諸国との接触が増えるにつれ、西洋と関連した文書に「旅行」の表記が見られるようになる。江戸時代を通して、「旅行」は幕府の行政文書に使われていたが、江戸時代末期に来日した西洋人について記述した幕府の文書についても「旅行」が見られるようになる。以下は、イギリス公使のオールコックと幕府の役人との対話と、オールコック自身の手記を翻訳したものであるが、彼の居留地外の移動に「旅行」が使われている[38]。

○ 一. 唯今其筋相糺し候処附添役人之支度等迚も整ひ申間敷旨申聞候
一. 明日ニも御支度有之候得者整ひ可申与存候其訳者私身分ニ而旅行いたし候事ニ無之候極々簡易に旅行致し候【『通信全覧』 第二編 類輯七十一(万延元・1860)】[39]

○ 余私用にて出て遊心保養の為に旅行するなれば只平生使ふ所の召使及ひ馬のミを帯ひ行べし而して其要とする所に準して旅具およひ人足も携へ行くべし (中略)此旅行を以て余も既に健康に復し且余が草写し得るよりも豊饒にして明媚なる地を旅行せしを以て満足せり【『通信全覧』 第二編 類輯七十一(万延元・1860)】[40]

また、江戸時代末期からは、幕府や各藩から西洋諸国への遣外使節団の派遣が相次いだが、これらを「旅行」と表現しているものも見られる。

○ 乃ち此條は去る文久辛酉の年余か欧羅巴に航して現に聞き見せし所のものを

38) イギリスの外交官オールコック(Rutherford ALcock)は、1859年5月から1864年11月まで日本に滞在した駐日公使である。彼は1860年9月、居留地を出て富士山を登頂した後、熱海に立ち寄ったが、これは外国人としては前例がないものであった。幕府は移動を阻止しようとしたが、オールコックの決意が固いと知ると、警護の者を差し回した。その行列は1000人を超えるものであったという。(佐野真由子(2003)『オールコックの江戸』中公新書、pp.125~131)
39) 通信全覧編集委員会編『通信全覧』第六巻、雄松堂出版、p.409
40) 上掲書『通信全覧』第六巻、p.406

手録し傍ら経済論等の諸書を引て編集するものなり但し吾欧羅巴の旅行と雖ども、僅か期年を踰へざれば、固より観光のみにして、詳に彼国の事情を探索するに暇あらず【『西洋事情』初編 巻之一「小引」(慶應2・1866)】[41]

以上のように、日本人自らが西洋に赴くことを「旅行」としているが、そのほかにも、自らが見聞きした西洋で行われいる移動や、読書などで得た西洋の移動に関する情報に対しても「旅行」を用いている。

○ 若しミニストル本国其外へ旅行いたし折合不申時は、代わりとして書記官参会に罷出候通例に有之。【『英国探索』(文久2・1862)】[42]

○ 議事官の給料は両院共に一人に付一日八「ドルラル」と別に旅行の雑費として二十人毎に八「ドルラフ」を与へ両院の上席は一日に十六「ドルラフ」を与ふ【『西洋事情』初編 巻之二(慶應2・1866)】[43]

年号が変わり、明治開化期に書かれた西洋における移動について書かれた文献の中には、当時の日本ではまだ敷設されていなかった鉄道を使った移動を「旅行」とし、利便性や安全性を説いたものも散見されるようになる[44]。

以上のように、江戸時代末期の西洋文化との接触により、西洋人が行う移動、または日本人が西洋諸国に赴くことを「旅行」としているが、一方、江戸時代末期から編纂が始まった対訳辞書にも、オランダ語、英語、フランス語の訳語として「旅行」が使われている。

---

41) 福澤諭吉(1898)『福澤全集』第一巻、時事新報社、p.9(「西洋事情」)
ここでの「観光」は≪他国、他郷の景色、史跡、風物などを遊覧すること。また、制度等を視察すること≫という意味である。「観光」の典拠は『易経』であるが、もともとは≪国の威光見る≫、≪国の文物や礼制を視察する≫という意味があった。日本でも中世以降、ほぼ同様の意で用いられてきたが、現在のような単なる≪遊覧≫の意味で用いられるようになるのは明治時代後半からである。(『日本国語大辞典』第三巻、p.1263)

42) 福田作太郎著、沼田次郎・松沢弘陽校注(1874)「英国探索」『西洋見聞集』日本思想体系66、岩波書店、p.489

43) 福澤諭吉(1898)『福澤全集』第一巻、時事新報社、p.13(「西洋事情」)

44) 拙稿(2006)「『旅行』の語誌について―江戸時代末期から明治時代を中心に―」『恵泉アカデミア』第11号、恵泉女学園大学社会・人文学会、pp.7～9

○【『和蘭字彙』(1853−1855・安政2−5)】
Op reis gaan 旅行スル
reisen. g.m.op reis rips 旅行スル
reizeiger. 旅行スル人
Ky gaat naan Frankryk reizen 旅行スル事ヲ好テ居ル[45)]

○【『英和對譯袖珍辭書』(1862・文久2)】
Itinerant, adj 旅行スル. 遍歴スル.
Itinerate-ed-ing. v.a. 旅行スル. 遍歴スル.
Journey-ed-ing. v.a. 旅行スル[46)]

○【『和英語林集成 英和の部』初版 (1867・慶應3)】
JOURNEY, Tabi; riyokō.
TRAVELING, Ryokō, tabi.[47)]

○【『仏語明要』(1864・元治元)】
voyage, n. 旅行
voyager, v.n. 旅行スル
voyageur, euse, n. et f. 旅行スル人、女[48)]

オランダ語では 'reis' 'reisen'に、英語では 'journey' 'itinerate' 'travel' 'voyage'に、フランス語では 'voyage'に「旅行」があてられている。ちなみに、『和英語林集成 和英の部』(初版・1867・慶應3)では「旅行」は、'To go on, to travel :— suru'と説明されている[49)]。

また、対訳辞書だけではなく、江戸時代末期より大量に上梓された翻訳書に

45) 桂川甫周著、杉本つとむ解説(1974)『和蘭字彙』第Ⅳ册、早稲田大学出版部、pp.2496~2498
46) 堀達之助著、惣郷正明解題(1973)『英和対訳袖珍辞書』秀山社、p.428、p.433、p.920
47) ヘボン著、飛田良文・李漢燮編(2000)『和英語林集成』初版・再販・第三版対照総索引、第三巻、港の人、pp.206、p.369
48) 村上俊英著、富田仁解説(1975)『仏語明要』巻之四、カルチャー出版、p.92
49) 原文は「RIYO-KŌ、リヨカウ、旅行、(tabi yuku) To go on、to travel :— suru.」となっている。(前掲書、『和英語林集成』第二巻、p.277)

も「旅行」が多く見受けられた。次は、江戸時代末期のオランダ語の翻訳である。

○ 我等儀先達にて本宅へ可帰と存じ、ブ村の方へ罷越候(中略)右旅行中ヨンケルを殺し候者を見出し候。【『和蘭美政録』文久元・1861)】[50]

○ ヂムスロスは涼き三夏に逢ひ、遠く南緯七十九度まで船を進め、其旅行中にて、新に発明する所多くして、星学者ガウスが定めたる磁石南極は、誠の極に非る確証を得たりと雖も、…【『玉石志林』(文久年間)】[51]

○ 実に世界を挙て亜人の如く、僅少の貯を以て旅行する者なし。亜人は、四千里の道を遠とせずして旅行すること、猶和蘭人の僅かにアルンヘムの旅行を為が如し。【『玉石志林』(文久年間)】[52]

以上のような、オランダ語の翻訳だけではなく、年号が明治に変わる頃から英語やフランス語などの翻訳も盛んになるが、それらにも「旅行」が多く見られるようになる[53]。

これまで見てきた江戸時代末期に「旅行」が登場する文献の書き手は、主に武士階級(または旧武士階級)である。江戸時代を通して、幕府の行政文書に「旅行」が用いられていたことから、彼らが「旅行」を使用したことは至極当然のことであろう。また、武士階級(または旧武士階級)は教養として漢文を習得していたことから、この時期の武士階級(または旧武士階級)が書いた西洋に関連する文献には漢語が多く使用されており、このことも「旅行」が散見されるようになった理由として考えられるだろう。

その後、明治時代初期に、翻訳書、対訳辞書、西洋の事情を紹介した文献が大量に上梓されると、「旅行」も江戸時代末期よりも況して散見されるように

---

50) 神田楽山著、吉野作造他編(1927)「和蘭美政録」『明治文化全集』第十四巻、翻訳文芸編、日本評論社、p.36
51) 箕作阮甫訳、吉野作造他編(1928)「玉石志林」『明治文化全集』第十六巻、p.14
52) 上掲書「玉石志林」『明治文化全集』第十六巻、p.81
53) 前掲書「『旅行』の語誌について―江戸時代末期から明治時代を中心に―」pp.10~12

なる。これにより、「旅行」に新進的なイメージが付加されたと見ることができる。つまり、「旅行」には、≪旅≫や≪旅に行く≫という明示的意味(denotation)に加え、≪新進的なもの≫という副次的意味(connotation)が発生したのである。副次的意味に関して言えば、後に明治新政府が定めた届、願、法令といった法律などにも「旅行」が使用され、公的な認識が生まれたことも記しておきたい[54]。

江戸時代末期の「旅行」は、西洋文明との関わりの中で用いられるようになるが、一方で、読本などの庶民が愛読していた文献には「旅行」はほとんど見られない。このことから、「旅行」は、江戸末期においても武士階級(または旧武士階級)といった知識層を中心に使われていた位相語であり、文書語であったといえる。江戸時代末期からの西洋文明との関わりにより、「旅行」に≪新進的なもの≫という新たな副次的な意味が付加されたことが、明治以降に「旅行」が近代文明の恩恵を受けた語と認識され、一般に普及し、現在のような日常語として定着していくことに繋がっていくのである。

6. おわりに

以上、明治以降に一般に普及した「旅行」という語について、江戸時代末期までの来歴を整理すると、次の通りである。

「旅行」は中国の漢文が典拠である。日本での音読みされた用例は、平安末期の『江談抄』が初出である。中世、近世を通して「旅行」は武士や貴族、僧侶といった支配・教養層が主に使用する位相語であり、文書語であった。特に、江戸時代には幕府の公的な記録や武士の残した文献に多くの用例が確認でき、また、旅のガイドブックの類などにも用例が見当たることから、使われ方に広がりが生まれている。

江戸時代末期には西洋文明との関わりにより、西洋人の行う移動や日本人が

54) 前掲書「『旅行』の語誌について—江戸時代末期から明治時代を中心に—」、pp.6~7

遣外西洋に赴くことを記した文献、対訳辞書、翻訳書など、主に武士階級(または旧武士階級)といった知識層が読み書きしたに用例が散見されるようになり、これによって、「旅行」が持つ≪旅≫≪旅に行く≫という明示的意味(denotation)に加え、≪新進的なもの≫を表す副次的意味(connotation)が付加されたことになる。「旅行」は、江戸時代末期においても、知識層を中心とした位相語、文書語の域を出るものではなかった。しかし、この江戸末期の西洋文明との接触による「旅行」の意味の変化は、明治以降における、近代文明の恩恵を受けた語であるという「旅行」の認識や、日常語としての定着の伏線となるのである。

참고문헌

石森秀三(1989)「旅から旅行へ」『日本人と遊び』現代日本文化における伝統と変容6, ドメス出版
阪下圭八(1982)「『旅』という言葉」『月刊百科』231号, 平凡社
佐野真由子(2003)『オールコックの江戸ー初代英国公使が見た幕末日本ー』, 中公新書
白幡洋三郎(1996)『旅行ノススメ 昭和が生んだ庶民の「新文化」』, 中公新書
新城常三(1971)『庶民と旅の歴史』NHKブックス143, 日本放送出版教会
飛田良文(2002)『明治生まれの日本語』, 淡交社
広田栄太郎(1969)『近代訳語考』, 東京堂出版
柳田国男(1964)「旅行の進歩及び退歩」『定本 柳田国男集』, 筑摩書房, 第二十五巻
拙稿(石塚令子)(2006)「『旅行』の語誌について―江戸時代末期から明治時代を中心に―」『恵泉アカデミア』第11号, 恵泉女学園大学社会・人文学会

【辞典】

白川静(1984)『字統』平凡社
日本国語辞典編集委員会編(2002)『日本国語大辞典』第二版, 第三巻, 第十三巻, 小学館
室町時代語辞典編纂委員会編(2001)『時代別国語大辞典 室町編』五, 三省堂
諸橋轍次(1989)『大漢和辞典』修訂第二版, 巻五, 大修館書店

※用例で使用した文献は除く。

❖ 투고일 : 2006. 6. 30
❖ 심사일 : 2006. 7. 31
❖ 심사완료일 : 2007. 2. 15